Nara Women's University

近代における『奇異雑談集』の受容:南方熊楠・柳田国男旧蔵本を中心として

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 奈良女子大学日本アジア言語文化学会 公開日: 2022-09-06 キーワード (Ja): 仮名草子, 奇異雑談集, 南方熊楠, 柳田国男 キーワード (En): 作成者: 今枝,杏子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10935/5837

近代における『奇異雑談集』の受容

――南方熊楠・柳田国男旧蔵本を中心として――

今枝杏子

本稿ではまず、新出の南方・柳田旧蔵本の概要について紹介し、両氏が本書を入手するに至った経緯について確認する。そして、柳田・南方がそれぞれどのように本書を著作に取り入れていたかを明らかにしていきたい。

本稿では『奇異雑談集』の所収説話について説明する際は、写本の目録に従って示すこととする。

一　南方熊楠・柳田国男旧蔵本概要

まず、南方熊楠旧蔵本（以下「顕彰館本」）の書誌を記す。

南方熊楠顕彰館所蔵『奇異雑談』

写本。上下二冊。縦二十四・二センチ、横十六・四センチ。四百字詰め原稿用紙仮綴じ。表紙なし。一丁表面に題箋貼付『奇異雑談　二冊』（写真①）。高木敏雄による筆写。写

序

貞享四年（一六八七）に仮名草子として刊行された『奇異雑談集』は、その後の怪異小説出版ブームの先駆けとして注目される説話集である。本書の諸本は、上下二巻全三十九話からなる写本系として、無窮会図書館平沼文庫本、島原図書館松平文庫本、現在所在不明の吉田幸一氏旧蔵本の三種類が、刊本系では六巻全三十四話として再編された貞享四年本と、刊記を削り新たに序文を付した後刷本が確認されている。[1] これに加えて今回調査の結果、近代において民俗学の発展に大きく寄与した柳田国男と、柳田とも交流を持ち世界中の説話を対象とした説話学研究を行った南方熊楠のそれぞれが写本を所持し著作に用いていたことが明らかになった。

本の写し。諸本では下巻第十五話にある「干将莫耶が劔の事」が顕彰館本の目録では下巻第十八話となっており本文欠落（下巻二十四丁裏該当箇所には「原本欠く」と記載あり）。本文欄外などには南方自筆の書き込みあり。識語「この奇異雑談ハ天正比の古写本なり。そも〳〵此書ハ天文中江州佐々木の幕下にて中村豊後守の男某、僧となりて編集せる古本也。柳亭所蔵なるを借り得て書写するものなり。天保十一庚子三月二日　緑亭川柳記」（写真②）

写真①　顕彰館本 1丁表

写真②　顕彰館本　識語

先述の三種の写本のうち、吉田幸一氏旧蔵本には、江戸時代後期の戯作者である柳亭種彦の識語がある。[2] 顕彰館本の識語を著した川柳点者の緑亭川柳が見たのはこの本であろうと推察されるが、書写者である高木敏雄が見た段階では下巻第十五話が欠落しているので、顕彰館本の底本となった写本は緑亭川柳所持本そのものではなかったと考えられる。しかし顕彰館本が吉田幸一旧蔵本と非常に近しいものであり、現在では確認されていない緑亭川柳所持本系統の写本が存在していたことの証左であると言えよう。

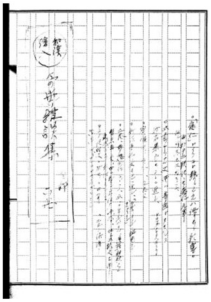
次に、柳田国男旧蔵本（以下「柳田文庫本」）についての書誌を記す。

成城大学民俗学研究所柳田文庫所蔵『奇異雑談集』

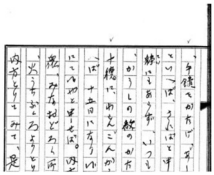
写本。一冊。縦二十五・九センチ、横十七・八センチ。四百字詰め原稿用紙袋綴じ。表紙あり。題簽『奇異雑談集』。内題『和漢絵入奇異雑談集　全部六冊』。後刷本の写し。書写者不明。上巻第十六話（刊本第三巻第一話）「四竪五横のきどくたんてきなる事」本文欠落。張り紙「第三巻の第一項全部漏脱（但し一枚ばかり）」。柳田による自筆書入れあり。

筆跡から本文書写者は柳田でないことは明らかだが、底本の表紙を写した一丁表（写真③）には説話の年代に関するメモや、文体に関する柳田の見解などが自筆で書き入れられている。[3] また、柳田は蔵書に〇、△、✓などの印を書き込むことが特徴であり、本書にも本文欄外にこうした印をつけていることが確認

できる（写真④）。この印は、○は「サシアタリノ問題ニ入用ナ点」、✓は「モウ一度見タイ点」、△は「民俗語彙ニ利用スベキ点」の意味がある。



写真③　１丁表柳田のメモ



写真④　上部欄外柳田自筆の✓

二　入手に至る経緯

南方が初めて『奇異雑談集』に興味を持ってから写本を入手するまでのことは昭和十一年（一九三六）十月三日新聞『日本』掲載の「馬子を救った河村瑞軒」に詳細に書かれている。

予八、九歳の時、『和漢三才図会』に、禅僧が女に変じて人の妻となった話を、『奇異雑談』より引きあるを見、定めて珍談を多く集めた書だろうと想い、手を尽して捜したが見当たらなんだ。しかるに、過ぐる大正元年、故高木敏雄君、件の馬の話を抄して、その根本また類似の話が本邦もしくは外国にありや、と問われた。抄文のみ見て考証は出来難く、かの書は四十年近く一見を渇望するものゆえ、何とぞ一本を手に入れて送りくれぬか、と頼みやった。すると高木君は貧乏世帯の多忙中にも関せず、印刷本がないから、数日限りの約束で人から借り受け、上下二巻を残らず写し了り、手ずから表紙なしの仮綴に仕立てたとて、全篇を送り越された。その二冊が現に眼前にある。その写本を通覧して、それに出た諸話を種々と考証して、しばしば高木君に送ったが、件の「馬、細橋を往きて渡らざる」を老人の智略で安穏に引き戻した話の根本どころか、類話一つをすら内外の文献より見出だし得ずして、今年に及んだ。その間に、過ぐる大正十一年上京の際、高木君を尋ぬると、すでに死後数歳と聞いた。

これによると、幼少期に『和漢三才図会』を通して知った『奇異雑談集』という書名は長く南方の記憶に留まり関心を引き続けたという。

入手に至る経緯を、南方の書簡を通してさらに詳しく見ていきたい（資料　『奇異雑談集』関連南方熊楠書簡　参照）。南方が本書について言及したのは明治四十四年（一九一一）三月二十一

日付の柳田国男宛の書簡が現在確認出来る最初のものである。この書簡で南方は「戦国のころ（文明ころか）近江の中村某の著『奇異雑談』と申すもの、小生一覧致したく、いかに捜索するも手に入らず候。もし御蔵書中にあらば半ヶ月間ばかり御貸し下されたく候」と述べている。南方と柳田との交流はまさにこの年の三月に始まったところであるうえに、前の話題と関連なく突然話を切り出していることから、南方が『奇異雑談集』の入手を熱望していた様子がうかがえる。同月二十六日には「『奇異雑談』は御地にて写し得べくんば、小生筆写料は出し申すべく、何とぞ誰かやとい写させ下されたく候」と、早速具体的な交渉を始めている。

翌年明治四十五年には柳田を介して知り合った神話学の泰斗高木敏雄とも文通が始まる。昨年来柳田から色よい返事のもらえなかった南方は、二月六日付の高木宛書簡で「『奇異雑談集』というもの六巻ありという。小生幼少の時より見たく存じ心掛くれども、見ること能わず、貴下の知人等御所持なきや。また東京図書館にありと聞く。誰か相当賃を出し、小生のために全体写しくれずや、御問い合わせ下されたく候」と、柳田に尋ねたのと同様のことを書き送った。南方からのこの問い合わせに対して二月十日には高木から「『奇異雑談』と申す写本（二冊）、早速近所にて借用拝見いたし候処、奥書にはエライ事書き有之候得共、内容は『百物語』や『御伽婢子』一流の翻案にて、文章拙劣、記事浅薄、到底読むに不堪、凡て四十条有之候へ共、全然取るに不足、何の役にも相立申間敷と存じ候」との返事があった。高木にとっては『奇異雑談集』の内容は取るに足らないものであると感じられたようだ。

入手に向けて高木とやり取りするのと同時に、南方は柳田との交渉も続けている。二月十一日付けの書簡では「そのころの社会思想の一汎を見るに必要なるものと思い、議論など出すときに又引きではたしかならず、なるべく何巻何章何段と明示せねば欧米の学会では受け取らず、小生またその規則の主張者たれば、悉皆写し取りてほしきに候」と、自分の研究姿勢を引き合いに出し、重ねて全巻書写の依頼をした。「紙数は知れぬが、まず三円ばかりで写され得ることなら写させ下されたく候。小生今は余裕ないから、全部三円内で写すことならずば、その幾部分でも、試みに一枚三銭ぐらいで写させ下されたく候」という交渉は南方の金銭的状況が垣間見えると共に、それでもどうにか手に入れたいという南方の執着がみてとれる。

こうして交渉を重ねた結果、二月二十三日に高木から写本が送られてくる。受け取った南方は早速一読し、成立に関する自分の見解と簡単な感想を高木に書き送った。『剪灯新話』の引用だけがましであると資料としての価値の限界をいう一方で、「今日聞も及ばざる古諺なども見え、又言語の転訛を見るに好き事も多く有之候」と、南方は言語資料としての価値を見出したようだ。この日の南方の日記の受信欄には「高木敏雄ハ二、[4]奇異雑談2冊同氏写しくれる。書留にて着す」と記載されている。

一方、柳田が本書を入手した経緯は不明であるが、南方旧蔵本が写本の写しであったのに対し、柳田旧蔵本が刊本の写しであったことから、南方や高木との交流の中で書写されたものではなかったであろうことが推察される。大正九年（一九二〇）に刊行された『赤子塚の話』（玄文社）の中で柳田は本書下巻第五話「国阿上人の事」を紹介しており、注に「奇異雑談集下巻。戦国時代に出来た本と称して居る。私まだ見得ないが、山州名跡志の八坂正法寺の條、近江国輿地誌略の大津国阿堂の條などに、本文を引いて居る」とあり、この段階で柳田はまだ本書を入手していなかったことがわかる。

三　柳田国男と『奇異雑談集』

続いて、柳田が著作の中で『奇異雑談集』所収の説話を利用した例を見ていく。その最も早いものは、前章で紹介した大正九年の『赤子塚の話』である。柳田は母の死後に墓の中で生まれた子が後に高僧となるという土中誕生の僧の話の変化した形として下巻第五話「国阿上人の事」を次のように紹介している。

> 右様の縁起を伝へる名僧は、別に特定の宗旨には限られて居らぬやうである。例えば時宗の一派、京都東山道場の開祖に就ても、同種の物語が最古く流布して居た。但し此場合の変化は稍大きく、大智識と為つたのは穴子では無く、他の話に於ては小な役の、幽霊の夫、赤子の父が之に当つて居る。

柳田は、他の話では後に僧となったのが生まれた赤子であるのに対し、国阿上人の話では墓から生まれた赤子の父親が出家したという点に注目している。

また、柳田は『日本文学大辞典』（新潮社　昭和七～十年）の頭白上人の解説でも同話に言及しており、幽霊餅買いの話の例

として「記録の実証する限りに於いては、『奇異雑談集』に載せられた霊山国阿上人の逸話が最も古いやうである」と述べている。

ここで、『赤子塚の話』執筆に際して、柳田が参照したという地誌『山州名跡志』[5]と『近江国輿地志略』[6]について確認しておきたい。先述のとおり、柳田はこの段階ではまだ『奇異雑談集』を見ておらず、これら二種の地誌から孫引きしている。『山州名跡志』は京都の僧白慧によるもので、正徳元年（一七一一）に京都の書肆から出版された。[7]本書では巻二の霊鷲山正法寺の条[8]で、「奇異雑談ニ云ク」として『奇異雑談集』下巻第五話の全文が引用されている。また、この他にも京都の清水の付近にあったという「三本卒都婆」という場所について上巻第一話「五條の足軽京にて死するに越中にて人これにあふこと」の冒頭部分を引用している。[9]延年寺の条、[10]中山の葬所の条[11]では下巻第六話「四條の坊門烏丸西光庵の事」からの記載が確認できる。享保十九年（一七三四）成立、膳所藩の儒官寒川辰清が記した藩撰地誌の『近江国輿地志略』では、巻八の志賀郡大津国阿堂の条[12]で国阿の経歴に続いて、「奇異雑談にいはく」として『山州名跡志』と同様に全文が引用されている。近世中期頃には『奇異雑談集』が地誌類に利用されるようになっている点は注目されよう。[13]

大正十五年（一九二六）刊行『山の人生』（郷土研究社）では鬼の子が里にうまれた例を挙げている中で、鬼子の最も恐ろしい例として上巻第十四話「獅子谷鬼子の事」の大筋を次のように紹介ており、『赤子塚の話』の時と同様に、柳田は当該説話を『玄同放言』[14]で参照したことがうかがえる。

> 鬼子の最も怖ろしい例としては、明応七年の昔、京の東山の獅子が谷という村の話が、『奇異雑談集』の中に詳しく報ぜられている。『玄同放言』三巻下には全文を引用しているが、記事にはあやふやな部分がちっともなく、少なくとも至って精確なる噂の聞書である。（中略）この事常楽時の栖安軒琳公幼少喝食の時、崖の下にて打ち殺すをまのあたり見たりと謂へりとあって、事件の当時から約九十年後の記述である。

『玄同放言』は文政元年（一八一八）に東都書肆文渓堂から刊行された滝沢馬琴著の考証随筆である。本書では、酒呑童子の項目で「奇異雑談集巻二に云、」として全文引用している。また、引用に続いて割注に次のような記述がある。

この書は、全部六巻なり、天正のころ、近江六角の家麾下の武士、中村豊前守が男、某甲が著せし草子物語なり、みづから見聞きせし奇異の事を、書つめたりといふ、よに信られぬ事多かれども、さすがに、作り設たる物語にはあらず。一説に、奇異雑談集は、中村某、天文十一年に著せしといへり、しからば明応七年より四十五年後の著述なり。

馬琴は『奇異雑談集』について、その著者や説話の年代について言及しているが、こうした記述は、『奇異雑談集』を利用した他の考証随筆にも見受けられる。

宝暦年中（一七五一～一七六三）前後刊行の大朏東華著『斉諧俗談』[15]では「男女に変ず」の項で上巻第二話「江州枝村にて、客僧にはかに女に成し事、並びに智蔵坊の事」の話の一部が引用されており、引用に続いて「按ずるに、奇異雑談は、天文十年、中村豊前守の子息著述なり。この事四十年以前にありといふ。時は明応年中の事なるべし」と書かれる。文政十一年（一八二八）刊行田沼善一著『筆の御霊』[16]では「棹をさ舟の事、肩衣及笈の事」の項で肩衣の用例として上巻第一話を、「女の髪を巻上る事、見せ棚の事、窓の様、茶を売る状」では、茶屋の様子として上巻第九話の「糺の森胡瓜堂の事」の一部をそれぞれ引用しており、「奇異雑談は、室町将軍の比、江州佐々木家の臣中村豊前守といへる人の記る書なり、」と述べられる。

『奇異雑談集』は語り手として固有名詞が記載されること、編者自身が見聞きしたとされる話が多く見られることが特徴として挙げられ、上巻第十五話に語り手自身のことについて「六角殿文明年中に妙感寺に居住す。数年に諸侍みな家をつくりて居せり。予が父中村豊前守も家をつくりて居するなり」という記載がある。後刷本の序文や、吉田幸一氏旧蔵本にみられる柳亭種彦の識語はこの部分から本書の著者を中村豊前守の息子であるとしている。[17]考証随筆の作者たちもこの記述によって、著者が明らかな信憑性のある室町期の資料として本書をとらえられていた様子がうかがえる。

柳田の著作に話を戻したい。昭和四年六月発表「葬制の沿革について」（『人類学雑誌』四十四巻六号）では埋葬場所の俗語的名称の例として「奇異雑談集などを見ると、罷物所と書いてハモツショと訓ませた例もある」と本書下巻第六話「四条の坊門烏丸西光庵の事」本文の語彙を挙げている。昭和二十一年（一九四六）刊行『物語と語り物』（角川書店）の自序では、越中について「信濃の霊場を拝みに行く遠近の旅人が、爰では屢し

ばしば不思議な事を見る習ひだったといふことも、奇異雑談集の筆写が夙にこれを説いて居る」と、上巻第一話「五條の足軽、京にて死するに越中にて人これにあふ事」の内容に触れている。

以上、『奇異雑談集』が用いられた柳田の著作について確認を進めてきた。例えば赤子塚の話の中では本邦で広くみられる餅買い幽霊譚について考証する中で、他の高僧の縁起とは大きく異なる形を有する点に注目し、遡りうる最古の記録として本書の説話を位置づけた。また、『山の人生』の中では「記事にはあやふやな部分がちっともなく、少なくとも至って精確なる噂の聞書である」と述べ、前近世の実証的な資料として扱っている。これは近世考証随筆を著した国学者たちの態度と共通していると言えよう。柳田の視線は『奇異雑談集』の説話を通して、近世以前の日本の習俗に注がれているのである。

四　南方熊楠と『奇異雑談集』

南方の著作のうち、『奇異雑談集』が用いられたものは先に紹介した新聞『日本』掲載「馬子を救った河村瑞軒」の他に、「『郷土研究』一至三号を読む」(『郷土研究』一巻七号、大正二年九月)、十二支考「馬に関する民俗と伝説」(『太陽』博文館　大正七年)、「死んだ女が子を産んだ話」(『南方閑話』坂本書店　大正十五年)がある。これら著作の中で言及されている所収説話は、下巻第四話「姑獲の事」、同第五話「国阿上人の事」、同八話「江州甲賀、名馬の事」、同九話「馬、細橋を行て、わたらざる事」の四話に留まる。先述のとおり、南方は『奇異雑談集』を入手するにあたってかなりの執念を見せていたが、それにしては自身の著作には積極的に用いなかったように思われる。入手直後の明治四十四年二月二十五日には高木敏雄に「この他にもいろいろ大いに益を得申し候」、翌二十六日には柳田に「小生はこの書により大いに発明するところ多し。そのうち申し上ぐべく候」と書き送っているが、これらの成果はなぜ発表されるに至らなかったのだろうか。まずは、その理由について考察していきたい。

同年三月二十一日、南方は柳田宛書簡で次のような質問をしている。

『三余叢談』に、『真俗雑記抄』というものをしばしば引けり。二十の巻云々とあれば、二十巻ばかりありしなるべし。その記事を抄せるを見るに、みな高木敏雄氏写し送らるる二冊物『奇異雑談』にあることどもなり。『奇異雑談』

は『真俗雑記』という書の抄物かと思う。『真俗雑記』という書、貴下見たることありや、伺い上げ奉り候。

『三余叢談』に引かれている『真俗雑記抄』の記事が『奇異雑談集』の内容と同じであると南方は指摘しており、翌日には同内容を高木にも書き送っている。

長谷川宣昭著『三余叢談』[18]は文政五年（一八二二）書肆和泉屋金右衛門から刊行された考証随筆である。同書では、書名こそ記載されないが、本書からの引用とみられる記事が複数ある。まずは、桶の異名である「めんつ」についての項を確認する。

○めんつ

真俗雑記問答抄廿の巻、古堂の天井に女を磔にかけおく事の条に、水呑みたきよし申ほどに、おりて井をたづね、めんつに汲で、天井にのぼりてあたふ。女人水をのみてよろこびと云々。宣昭按に、めんつは今俗にメンツウといへり。食桶の湯桶読にや。

『真俗雑記問答抄』は鎌倉期中期の学侶頼瑜の著作であるが、現在確認できる本文には該当する記事は見出せず、この箇所は『奇異雑談集』上巻第四話「古堂の天井に女を磔にかけをく事」と本文が一致していることが確認できた。また、この記事以外にも『三余叢談』では『真俗雑記問答抄』からの出典と示された記事についで「同書同巻」として『奇異雑談集』からと見られる引用が七項に亘って続く。『三余叢談』のこれらの記事から南方は「『奇異雑談集』は『真俗雑記問答抄』の抄物ではないか」という疑念を抱いた。そのため南方は本書に説話資料としての価値をつけず、入手前の執着とは対照的に数話が著作に利用されるに留まったのではないだろうか。

それでは、南方の著作において『奇異雑談集』がどのように扱われたかについて確認していく。柳田がたびたび引用していた「国阿上人の事」には南方も興味をもっており、「『郷土研究』一至三号を読む」「死んだ女が子を産んだ話」の両稿で「『奇異雑談』下巻に」として同話のあらすじを紹介している。また、前掲の新聞『日本』「馬子を救った河村瑞軒」に引用された下巻第九話「馬細橋を往きて渡らざること」は大正七年発表の十二支考「馬に関する民俗と伝説」でも同様に紹介されている。これは、細い橋の途中で止まってしまった馬を老人の知恵によって渡らせたという話で、南方はこの話が河村瑞軒七才の時の事とする類話があることを指摘している。「馬に関する民俗と伝説」ではもう一箇所、馬には憎悪の念が強くある事を

論じるために数話を挙げ、その中で「馬が人のために復讐した話」の例として下巻第八話の「江州下甲賀名馬の事」を紹介している。

このように、南方の著作では、『奇異雑談集』の説話は類話の一つとしてしか扱われておらず、また、その類話についても「似ている」「〜という話もある」と紹介するに留まりそれらの関係性や変化といったことには言及されないことが特徴として挙げられる。これは膨大な資料の中から類話を見出し、それを提示することに重きをおいている、南方の研究姿勢に起因すると考えられる。[19] 先述した疑念によって、『奇異雑談集』所収の説話は南方の説話研究の素材として多用されることはなかったが、顕彰館本には南方の書入れが多く残されており、強い関心を持って読んでいたであろうことは推察される。今後は、こうした書入れについても検討をすすめ、本書が南方に与えた影響を明らかにしていきたい。

結

以上、民俗学、説話学の黎明期に柳田国男・南方熊楠が『奇異雑談集』に興味を持ち、それぞれ写本を所持し、著作の中に利用してきたことを明らかにした。また、近世期を通じて考証随筆や地誌類に用いられ、さらに民俗学・説話学の素材として展開していく様相を、従来の「怪異小説の嚆矢」とは異なる『奇異雑談集』の側面として提示できたのではないだろうか。本稿では近世期の展開の具体例として数例を紹介するに留まったが、今後の研究の中でさらに多くの例が見出されるものと考えられる。その上で考証随筆に用いられた他の資料と比較検討しながら、本書の位置付けをすすめていきたい。

本稿は、第四回南方熊楠研究奨励事業の成果と、平成二十五年度仏教文学会高野山大会での口頭発表を基にしたものである。調査にご協力いただいた南方熊楠顕彰館、成城大学民俗学研究所に御礼申し上げる。また、柳田旧蔵本の存在をご教示いただき調査にまでお付き合いくださった故・増尾伸一郎先生に深く感謝の意を表する。

補記

本稿では、南方熊楠の書簡、著作は『南方熊楠全集』（平凡社）、柳田国男の著作は『柳田國男全集』（筑摩書房）から引用した。

注

（1）冨士昭雄「奇異雑談集の成立」（『駒沢国文』第九号、一九七二年）、吉田幸一編『近世怪異小説』解題（古典文庫、一九五五年）

（2）吉田幸一旧蔵本識語

「この奇異雑談ハ天正比の古写本なりそも〳〵此書ハ天文年中江州佐々木の幕下中村豊前守の男某僧となりての編集ニて今伝はる印本に漏たる叟五段この写本ニあり珍重す壁もの歟

文政己丑初夏　柳亭種彦」

（3）メモの全文は判読できないが、「応仁元年」「明応」「文明」など本文中に示されている年号を抜書きしている。また、「文体ハ普通トオモハレス沙石集モコレに近シ」と本書の文体にも言及している。

（4）「ハ二」は「葉書二枚」の意。

（5）『新修京都叢書』（臨川書店、一九六九年）

（6）『大日本地誌大系』（雄山閣、一九二九年）

（7）版元：京都書肆　出雲寺和泉掾／小佐治半右衛門／中村孫兵衛／杉生五郎左衛門／小山伊兵衛

（8）注（5）三十七―三十八頁

（9）注（5）四十頁

（10）注（5）六十一頁

（11）注（5）一一五頁

（12）注（6）六十八頁

（13）怪談・奇談として刊行された『奇異雑談集』がその後怪異小説や仏教唱導に取り込まれていったことについては堤邦彦『江戸の高僧伝説』（三弥井書店、二〇〇八年）、同氏『女人蛇体偏愛の江戸怪談史』（角川学芸出版、二〇〇六年）等の論考が備わるが地誌類での引用については言及されていない。

（14）『日本随筆大成』一―五、二六二―二六三頁（吉川弘文館、一九七五年）

（15）『日本随筆大成』一―十九、三三二頁（吉川弘文館、一九九四年）

（16）『改定増補故実叢書』二十九、一八三頁（一九五二年）

（17）本書の草稿本的説話集である『漢和希夷』の発見により、現在では『奇異雑談集』はいくつかの小篇の説話集を集めて成立したものであるというのが通説である。中村豊前守の息子は『奇異雑談集』全体の編者ではなく、そうした本の語り手の一人であろう。注（1）冨士氏論考参照。

（18）『日本随筆大成』三―六、十七頁（吉川弘文館、一九七七年）

（19）小峯和明氏はこうした南方の研究について『南方熊楠大事典』（松居竜五・田村義也編　勉誠出版　二〇一二年）で「同じような説話が世界のあちこちにみられる、その不思議さを問いかけている。地域や時代の隔たりを超えて類似する説話が語ら

れ、記録されることの意味をどう考えるかを熊楠は追求しようとしていたのである」と述べられた。

資料　『奇異雑談集』関連南方熊楠書簡

・明治四十四年（一九一一）三月二十一日柳田国男宛書簡

「戦国のころ（文明ころか）近江の中村某の著『奇異雑談』と申すもの、小生一覧致したく、いかに捜索するも手に入らず候。もし御蔵書中にあらば半ヶ月間ばかり御貸し下されたく候。」

・同年三月二十六日柳田国男宛書簡

「『奇異雑談』は御地にて写し得べくんば、小生筆写料は出し申すべく、何とぞ誰かやとい写させ下されたく候。」

・明治四十五年二月六日高木敏雄宛書簡

「『奇異雑談集』というもの六巻ありという。小生幼少の時より見たく存じ心掛くれども、見ること能わず、貴下の知人等御所持なきや。また東京図書館にありと聞く。誰か相当賃を出し、小生のために全本写しくれずや、御問い合わせ下されたく候。欧米の図書館読者中には写本を業とするもの多く、小生もこれを糊口の資とせしことあり。」

・同年二月十日南方宛高木敏雄書簡

「『奇異雑談』と申す写本（二冊）、早速近所にて借用拝見いたし候処、奥書にはエライ事書き有之候得共、内容は「百物語」や『御伽婢子』一流の翻案にて、文章拙劣、記事浅薄、到底読むに不堪、凡て四十条有之候へ共、全然取るに不足、何の役にも相立申間敷と存じ候。例へば『剪燈新話』の「牡丹燈」、「申陽洞」等の如きものの焼直しに御座候。上野の図書館本は未見候へ共、多分同一書と存じ候。何れ近日中に取調べ御通知申上候。

・同年二月十一日柳田国男宛書簡

「次に小山源治氏より聞くに、『奇異雑談』は六冊にて三十余条とかの怪談をかきしものの由、その内容は大略小生も読書より又引きしてひかえあり、つまらぬものと思う。しかし、『和漢三才図会』に引きたれば、それより以前のものと思う。文明中の書とはうそなるべし。（中略）『奇異雑談』に、一所で死せしもの、同時に他の距てたる所で人に見えしことあり。これは今もスコットランドなどに常事と考えおる人多し。（中略）また『奇異雑談』に、寡婦が店頭に胡瓜をつるしおきしを、小僧通りてこの胡瓜は和尚の一物に似たりといいしより思い付き、一計を案出する話あり。（中略）されば『奇異雑談』はうその書とするも、晩くとも徳川初世よりwraith の迷信多少世に行われ、また女子が胡瓜をもって自淫する風（もしくは世評）ありし証拠にはなり申し候。（中略）とにかく『奇異雑談』は、小生これほどの近世書中『塵塚物語』などと並んで徳川初世に早く出た書で、そのころの社会思想の一汎を見るに必要なるものと思い、議論など出すときに又引きではたしかなら

ず、なるべく何巻何章何段と明示せねば欧米の学会では受け取らず、小生またその規則の主張者たれば、悉皆写し取りてほしきに候。紙数は知れぬが、まず三円ばかりで写され得ることなら写させ下されたく候。小生今は余裕ないから、全部三円内で写すことならずば、その幾部分でも、試みに一枚三銭ぐらいで写させ下されたく候。」

・同年二月十二日柳田国男宛書簡

「只今高木敏雄君より来書あり、『奇異雑談』をその隣人宅にて見たりとのことなり。よって小生直ちに只今一書を出し、五、六日借覧を申し込めり。たぶん貸してくるるならん。よって貴下写させることは、右高木氏より吉左右あるまで御見合わせ下されたく候。」

・同年二月十六日柳田国男宛書簡

「貴下、一応高木氏へ聞き合わせ、高木氏すでに小生のためにその隣家より『奇異雑談』を借り送らずとならば、何とぞ誰かに借り、十二日間（往復共）御貸し下され候様願い上げ候。」

・同年二月十七日高木敏雄宛書簡

「十五日出貴簡はがき正に拝受、『奇異雑談』は小生自ら抄せんと欲し居り候もの故、拝借の上要処を抄し、貴下の写本は御返上可申上候。」

・同年二月二十日南方宛高木敏雄宛書簡

「『奇異雑談』は明日発送可仕候。本日は来客多く多忙に付、何れ明日委細可申上候。」

・同日柳田国男宛書簡

「『奇異雑談』は高木君写し送らるる由なれば、貴下より送り下さるに及ばず候。」

・同年二月二十三日高木敏雄宛書簡

「はがき二葉及び『奇異雑談』書留にて二冊送り被下、難有只今落手仕候。『奇異雑談』は、一読仕候に偽書には無く、寛永前後の禅僧が京に居りて見聞を記し、小学問もある処より『剪燈新話』の談などをも加入しと存候。『新話』の話など、本邦の談しに作りかえざりしだけがましなり。今日聞も及ばざる古諺なども見え、又言語の転訛を見るに好き事も多く有之候。委細読上何にか申上べく候。」

［参照『南方熊楠日記』1912.2.23（金）］

「受信：高木敏雄ハ二（奇異雑談二冊。同氏写しくれる。書留にて着す）」

・同年二月二十五日高木敏雄宛書簡

「俗小説神洞（『明和水滸伝』など申す）ともうす賊、常陸牛久の士の子なりしが、幼少の時外祖父方へ往き、小柄を草履の下へ挿み、盗み帰りしを見て、その父太田嘉伝次これを武州へつれ来たり、旅宿へ放置し去りしと申す。この話は『奇異雑談』より出でたること分かり申し候。この他にもいろいろ大いに益を得申し候。」

・同年二月二十六日柳田国男宛書簡

「『奇異雑談』は全部高木氏写し取り、一昨日郵送当方へ着仕り候。小生はこの書により大いに発明するところ多し。そのうち申し上ぐべく候。」

・同年三月二十日高木敏雄宛書簡

「『和漢三才図会』に、浄蔵が八坂塔を祈りしこと『奇異雑談』にありという。しかるに貴下より写し送られし本にはなし。貴下のは略本と存じ候。」

・同年三月二十一日柳田国男宛書簡

「次に『三余叢談』に、『真俗雑記抄』というものをしばしば引けり。二十の巻云々とあれば、二十巻ばかりありしなるべし。その記事を抄せるを見るに、みな高木敏雄氏写し送らるる二冊物『奇異雑談』にあることどもなり。『奇異雑談』は『真俗雑記』という書の抄物かと思う。『真俗雑記』という書、貴下見たることありや、伺い上げ奉り候。」

・同年三月二十三日高木敏雄宛書簡

「長谷川宣昭の『三余叢談』に、『真俗雑記問答抄』二〇に、とて天井に女を磔にかけ、その他多く引きたるを見るに、多くは『奇異雑談』にあることなり。『奇異雑談』は『真俗雑記』という二〇巻もある書の抜書かと存じ申され候。」

・大正二年（一九一三）四月十八日高木敏雄宛書簡

「先日の『奇異雑談』中には、童話と目すべきもの無之、強て採れば、（一）馬を人にして売る話（此話の出所―「唐代叢書」?―如何）、（二）馬の細橋を渡らざる事、位に候（此話は老人を尊重すべしとの旨に解し候処如何）。

――いまえだ　きょうこ・神戸女学院大学非常勤講師